Yamaguchi University

山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第22号（2006. 9）

古典文学研究と古典教育
―― 教師教育の基盤として ――

吉村　誠

The Study of Classical Liturature And The Education of Classical Liturature
―― At the Education of Teacher ――

YOSHIMURA Makoto
(Received July 20, 2006)

キーワード：古典文学、研究、古典教育、教師教育

1　はじめに

国語教育における古典分野は、我が国の文化や伝統を学ぶ契機として重要な教科の一つである。一方で古典文学研究は、学的体系のもとに文化論の追求とテキストのより深い解釈を目標とした研究活動として位置づけられる。従って内容的には研究と教育は深い関係を持っている。しかしそれらが密接なつながりの中で活動が行われているとは言い難い。その理由として研究成果が教育内容に十分反映されているかどうかという内容的な面が希薄に感じられる点と、研究者と教育実践者に密接な情報交換活動があるかどうかという点が掲げられる。国文学の専門学会と教育学会はそれぞれ独立して存在し、学問的方法や対象が分化しているというのが現状である。もちろん研究の方向性は教育現場を対象としているばかりでなく、広く社会の要求に応える必要はある。しかし大きな意味では古典文学研究と古典教育は内容的に同方向のものであると認識出来るにしても、研究成果の教育への転化が十分になされているとは言えないであろう。

この問題に気づいた全国大学国語国文学会が近年取り上げていることではあるが(注１)、教育においても学的方法や体系が確立され教科教育学としての独自性を持ってきている今日では、国文学研究とは別分野に属する概念が生じており、両者を融合して対象化していくことがあまりなされていない。そうした環境もあって教育実践者と研究者との意志疎通や情報交換の自覚的興味が希薄になっている傾向がある。細分化された分野においては、両者を広い見地から統合することは現実的には不可能に近い。例えば全国的な国語教育学会関連の機関誌や発表内容、教育関連雑誌においては、内容的な面で教材研究を対象としたものはある。しかし実践を背景とした教材研究であり、文学的な専門分野の学会の成果を取り入れて論じたものや、内容の学的研究を行っている研究論文は希薄である。また学燈社の「国文学　解釈と教材の研究」はその名前の通り、国文学の研究成果が学校現場での教材研究の補助的手段として創刊された経緯があるにしても、多くは大学教育の入門的

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

啓蒙書という傾向になってきている。一方、古典研究にあっても教育現場での需要に応えるものとしての研究対象は少なく、それぞれの学問分野での研究者の興味関心を中心とした研究が中心となっている。

しかし、古典研究にあっては教育分野での内容を十分に把握し、要求に応える必要はある。そしてそれを大学における広義の教師教育（教員養成系だけでなく、開放制における専門学部での教育）において反映させることが重要な課題であろう。もちろん教師教育に限らず、広く研究が教育に還元されなければならないことは昨今の大学教育の議論で大きく取り上げられていることであるが、研究成果が高等学校以下の中等教育においても反映されていくことが理想的であると考える。

そうした意味で中等教育における古典教育の要求がどこにあり、それを古典研究の対象として、その成果をどのように教師教育に反映させていくかということが重要な鍵となる。一方では研究者としての顔を持つ大学以上の高等教育の教員が、中等教育の理念や目標に無頓着な研究を主軸とした教育を施していては、学校現場の要求に十分応えたものとならず、ひいては研究そのものが無意味なものになってしまうことになろう。しかし従来はこの点がほとんど省みられず、研究内容を中心とした教育の充実のみで考えられていることが多い。

近年の全国大学国語国文学会の会誌「文学・語学」の特集号で　志水義夫氏は文学部系大学の学生の意識調査を全国レベルで行い、学生の古典文学を志望する動機が、高校教育における興味付けによることが大きいという特徴を報告されている(注２)。とすると高等学校での古典教育が将来の研究者養成の視点からも重要であることが知られ、高等学校における古典教育担当の教員を養成する機関にあっては、その責任は極めて高いものとなる。

そこで、本稿では、中等教育、特に古典の比重の高い高等学校古典の理念と、古典文学研究の理念を対比させながら、教師教育における古典教育のあり方を模索してみたい。

2　古典文学研究の歴史と目的

我が国の代表的な古典文学作品である万葉集や源氏物語を対象とした研究は、平安時代にまで遡る。西暦951年の村上天皇の時代に宮中梨壺に和歌所が設けられ、漢字表記であるために読めなくなった万葉集に平仮名で訓読を付す作業が行われたことが我が国の古典文学作品を対象とする研究の創始と位置づけてよいであろう。源氏物語の解釈を中心とした研究も平安時代末期には始まっており、特に推し進めたのは鎌倉時代初期の藤原定家である。それらは中世にかけて和学と呼ばれ、主に和歌を詠むための歌学として貴族や武士の間で行われてきたものである。ただしこれらのものは古今伝授(古今和歌集の意味内容を弟子に教える)に代表されるように、子弟関係を有する閉鎖的なものであった。

江戸時代になって、町人文化が台頭してくるにつれて、和学の延長として契沖に代表される万葉集研究や、源氏物語の研究などが地下（ぢげ）と呼ばれる町人や武士により従来研究の担い手であった堂上公家に対向して起こり、また一方で荷田春麿を始めとする古学研究が盛んになってくる。古学は古典の文献を通して古代のあり方を究明しようとする所に目的があり、有職故実（宮中の服飾、典礼、制度などの研究と解説)、国史(日本歴史)、和歌に広がる総合学的なものである。やがてそれは賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤などに継承されて行き、次第に思想的なものへと展開したが、契沖の業績なども含んで、江戸期

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

の国学(近世国学)と総称されるものである。

平田国学は思想に傾いた傾向があるが、江戸期国学(近世国学)は概して万葉集や古事記などの古代の文献を中心にして和歌や古代思想の究明に目的が置かれたものであり、近代ほど厳密ではないにしても中世和学の方法よりも文献実証的な方法による解釈が施されていて、学的方法の自覚による研究であると評価出来るものである。

近代に入り、西洋の文物が移入されるに至って、厳密な文献実証を中心とした近代国文学の時代に入る。国学の業績を引き継ぎながら、歴史学、国語学、国文学と学的体系に分類され、文献実証を中心とした帰納的な証明方法が尊重され、国文学においては綿密なテキストの系統や校本作成による基礎文献の構築が見られる。

そして方法的な自覚による研究が行われる。東京大学の芳賀矢一によるドイツ文献学の導入や、東北大学の岡崎義恵による文芸学などが特徴を持ったものとして掲げられる。その後、國學院大學、慶応大学の折口信夫による民俗学的方法や歴史社会学派による歴史主義的な視点からの解明、最近ではフッサールの現象学的方法や構造学、ポスト構造論と呼ばれるテキスト論が古典文学においても方法的に用いられる顕著な例である(注3)。

明治期の国文学研究の目的は、近世以前の和学と国学の流れが西洋思想の長所を取り入れながら国家的自覚をうながすものとしてあったと特徴づけられる。「和魂洋才」という言葉に象徴されるように、国家の近代化と同時に国家精神の基本を解明するという明快な自覚のもとになされ、国体(国家主権と天皇統治との関係)の究明を背景としながら、我が国の文化と伝統を明らかにしていくという所に本義が置かれていたと言ってもよいであろう。

そして具体的な内容は、古典文献の伝本的な解明、表現の分析、内容の分析の三つに大別出来る。文献的な解明は、古写本の系統や文字異同を明らかにすることにより、古典文学研究の基本となる本文の定位や基本テキストである校本の策定を中心とする。また表現の分析は岡崎義恵を中心とした文芸学と呼ばれる学的方法に代表されてきたように美学的な視点から表現性を特徴づけようとする(注4)。それは現代でも表現史という視点から文学の展開を考える上でも重要な問題である。

また内容的な解釈は、古典文学の扱いの中でも中心的なものであるが、テキストを現代的観念から評価されるだけのものではなく、成立当初の事情の解明や背景となる文化を考えた推察を必要とし、その視点からどのような価値づけを行うかということになる。そのための補助的な方法が様々に用いられてきた経緯がある。主に近代文学を対象とする研究において行われてきた方法であるユングの心理学的アプローチ、サルトルなどの実存主義、フッサールの現象学、ロランバルトのテキスト論、構造学、記号論などの哲学や文学・社会理論を古典文学に適用し、現代的単純評価を排斥する思考の中で行われてきている(注5)。また折口信夫による民俗学的方法は、柳田国男の民俗学的方法と交差しながら我が国の伝統文化をとらえた上でその思考法を探り、古典文学の解明に応用したものであり、一種の構造的解明であると言える。

古典文学は、元来は貴族を中心とした知識人の生み出した貴族文学であり、従って文学研究は、前近代では公家や武士、裕福な町人階級がその担い手となったように、大衆のものではない。それは戦前までも同様の特徴を持っており、知識階層が主導権を持っていたものである。しかし戦後の大衆化社会の中で、国体の究明という大義名分を失った古典文学研究は、文学という概念で再評価されながらも、国際化というグローバル化の視点の中

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

で、狭隘な対象でしかないという一般的な誤解を生み、危機的な状況に陥っていると認識される。

一方、こうした研究史やテキスト理解の様相は、最終的には文学史の構築に目的が置かれていると言える(注6)。個々の古典文学作品解釈は文学史の認識の構築が目的とされなければならない。もちろんここでいう文学史とは単なる文学作品の年代的羅列ではない。作品形成の状況を踏まえた内容や表現の相対的な定位を指しており、文化史や思想にもつながるものである。またそうしたことを把握するためには時代性や風習、習慣など幅広い総合的な視野も必要である。

文学の理解は、作者の思考、表現、意図、作品成立の背景、読者の受け止め方といった要素が総合的に組み合わさったものであろう。しかし古典文学の場合は、あくまで読者の認識による以外に目的を達成することは出来ない。もちろん作者側の論理は作品が形成される共同性を検証し、国語学的な言葉の意味理解や歴史学の成果を視野に入れておく必要はある。しかしそれらのものも認識より外に出ていない点では同じである。一方で読者側の恣意的な「読み」は制限を受けるが、恣意性と論証は結局の所、同一性をまぬがれない。

そして作者にとっての前時代の表現の享受と新たな創作を同時に視野に入れておかなければならない。このような文学の認識の史的構築が文学史であると言える。古典研究の意義が一部を残し和歌や擬古文の創作から離れた現代にあっては、我が国の文化の位置づけを行うことが大きな目的となる。その目的の内容が文学史の構築であると言える。個々の作家や作品の分析は、その史的流れの位置づけでないと意味がない。そうした観点から古典文学研究は、文学史の構築の指向にあると言える。

3　高等学校における古典教育の理念と目標

高等学校における古典教育の現状はカリキュラム的には、「国語総合」「古典」「古典講読」の三授業が段階的に設定されており、目標として言語文化に対する関心を高めることや古典の内容を通して豊かな人生観を育てること、我が国の文化と伝統に対する関心を深めることが学習指導要領に明示されている。(以下、学習指導要領等の資料は、『高等学校新教育課程の授業と評価　国語』田中孝一編　05．7　による)

これらの内容を詳しく見ると以下の目標に細分出来よう。

(1) 古文に親しむ
　言語感覚を延ばし、音読も含めて古文の表現を味わい理解する。

(2) 古典の内容を理解する
　単に古文読解に終わらず、書かれている思想や感情を理解する。

(3) 古典に興味を持つ
　当時の人たちの生き方や文化への関心を深める。

当然のことながら入門者を対象とした教授意識から掲げられているものである。親しむという点では百人一首などでゲーム性を加味した形での方法が効果的であり、一般的に行われている方法である。特に音読による古文独特の韻律への慣れと理解は最初に必要なことであり、古典に興味を持つ一つの要素であると言える。文語文の持つ独自な韻律への理解が読みを進める基本ともなるからである。ただここでは和歌などの韻文と散文の二つの要素のあることを理解しなければならない。また散文も擬古文を含む和文と和漢混交体に

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

見られる漢文訓読的要素への認識も必要なことである。漢語と和文の持つ相違や漢文訓読を基本とした文体への理解も音読には欠かせないものであると考えられるからである。

そして内容理解においては、文法的解釈と内容の解釈の二つがある。実践現場においては、文法的解釈で終わってしまい、その背後にある思想や感情への言及が薄れてしまっている傾向が見られる。もちろんこのあたりの教材研究は、上記国文学研究の成果と深くかかわる所でもあるが、それをわかりやすく啓蒙的に行う努力が必要とされる。

（3）は（2）と密接に関係している事柄である。歴史教科と横断的な部分であるが、古文理解のための必要な周辺知識であり、興味付けという観点では（2）と（3）はどちらの方向からでも可能なものである。ただし（3）の目的は、学習者の側から見た目標である。当然のことながら教育現場においては、教材の興味付けが第一のこととなる。古典学習において一番の障害となっているのは、古文の意味理解である。言ってみれば古文がインターフェースとなって「当時の人たち」の行き方や文化を知る作業を行うわけであるが、古文を読解する目標をその向こう側にある「当時の人たち」に置かないと、学習者にとって興味関心の対象とはならないであろう。多くのいわゆる古典嫌いの学習者の「嫌い」になる理由の第一に古文読解の難解さにあり、それは現代生活と隔絶した往古という意識が強くあるためであると思われる。しかし我々の生活や文化は往古の文化からの流れであるということを気づかせ、現代生活の中にも密接に古典の内容が少なからず入っていることがわかれば、興味付けの一助となることは当然のことである。

結局古典の学習内容としては、音読を含む表現を味わうことと古文の理解が大きな項目であり、表現には、散文と韻文への理解や漢詩文の文体を参考とした和漢混交体の味わい、擬古文を含む和文体があり、古文理解の内容は、文章内容ばかりでなくその背後にある思想、考え方、古人のものの見方など周辺教科とも連動する要素を取り込んだものであると言える。

その結果、目標としては次の四点を掲げることが出来よう。

（1）表現を味わう（言語文化を理解する）。

（2）日本の伝統文化を理解する。

（3）豊かな感性や教養を身につける。

（4）古典への興味・関心を培う。

この目標に対して学習者にどのように修得させるかという方法は教育論になり、この論の目的とは異なるのであまり詳しくは追求しない。

これ以外に平成10年12月14日告示の文部科学省初等中等教育局長通知によれば、「古典講読」において

古典を読んで、関連する文章や作品を調べたり読み比べたりすること

という項目がある。これは文学史的認識の必要性を述べていると理解できる。上述したように文学史は、単なる文学作品の成立や特徴的羅列ではなく、その時代の文学性の成立している根拠を前時代と比較し、その変化を追う作業である。そのことにより史的流れを認識出来、現代に至る特徴を探ることが出来る。

また、これ以外に必要と思われることは次の二点である。

・現代との比較　観念の普遍性への存在への理解と現代との相違点を明確にする

・背景としてある歴史的認識や風土への理解を促す。その延長に史跡や文化財への興味、関心を引き出す。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

古典教育の応用的な認識であるが、近年は歴史学習が希薄になっている傾向性が認められる。暗記科目としての批判や大学入試における試験科目の選択性などにより、特に日本史の学習が粗略になっていると言わざるを得ない。古典は歴史と密接な関係にあり、単に言葉だけの問題だけではなく、歴史認識と密接な関係を持っている。指導要領の内容である「当時の人たちの生き方や文化への関心を高める」という目標に向かうためにも周辺科目の総合的な学習が要求される所である。

最後に国立教育政策研究所教育課程研究センターが出した高校国語の評価基準案（平成14年7月）を掲げる。

各科目の評価の観点の趣旨

科目／観点	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解
古典	言語文化や伝統に対する関心を深め、国語を尊重して、進んで古典に親しもうとする。			古典に表れた思想や感情を的確に読み取り、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。	古典の理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。
古典講読	言語文化や伝統に対する関心を深め、国語を尊重して、生涯にわたって古典に親しもうとする。			古典に表れた思想や感情を的確に読み取り、生活や人生について考え、古典に親しむ。	古典の理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。

4　教師教育としての古典教育

以上のように高校現場での古典教育と研究分野としての古典文学研究の理念や目標をとらえてきたが、それらは概して近似しているところにあると言える。もちろん教育と研究は目指す方向は異なるが、古典テキストの処理内容はまったくかけ離れた所にあるのではなく、研究成果を教育において如何に反映させ、学習者が何を修得していくかという点では同じ位置にあると認識出来る。

一方、教員養成における教師教育は教育法と教材研究という二面がある。教育法は教育理論と現場実践の二つの要素に別れる。そして教材研究は教材開発と教材の内容研究の二種類になる。教材開発には古典全般の幅広い知識や観点が必要とされ、文学史的視点が要求される。また内容研究には対象とする古典テキストの主題分析や読解力が必要である。こうした点を考えると、教材研究分野において古典文学研究の成果の適用と、研究方法の応用と一致したものが見られ、研究活動と同様なものである。従って教師教育と文学研究

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

は分離したものではなく、研究は教師教育においても十分に反映させなければならない位置にあると理解出来よう。

以上の関係を図式的にまとめると次のような対応になる。

教師教育(古典分野)	古典教育	古典研究
教育法		
教育理論	理念と目標 ←→	理念と目標
現場実践		
教材研究		
教材開発	理念と目標に沿った教材化 ←→	文学史
内容研究	内容の修得 ←→	方法論や作品・作家論

この図式を見ると、共通部分は教育内容面に集約される。当然のことではあるが、現場実践を中心とする教育法とは古典研究はつながりをもたない。しかし修得にあたっての学習活動を考えると実践の要素は含んでいると考えることが出来る。

後の付図は、教師教育における古典教育のメカニズムを学習活動に視点を置いてとらえようとしたものである。教科としての国語の学習理念や目標が中等教育における古典学習に発展していった場合の、教師教育としての必要な要素をまとめたものである。

ここで重要なことは、古典教材の内容理解も重要な事項ではあるが、それに付随する学習活動である。特にレポートや演習課題、卒業研究における課題探求の活動においては、対象とする内容理解だけではなく、その作業過程において「学び」の姿勢が培われる要素を保有している。まず研究における研究法は、上述したようにそれ自身理論化された複雑な様相を持つが、その初歩的段階においては、ものの見方や考え方であると言えるものであり、どの学習過程においても必要なものである。またそれをまとめ、発表する（口頭、文字）という活動はプレゼンテーション能力の修得に寄与するものである。

もちろんこれは専門学部における活動にも当てはまることであるが、教師教育における古典学習活動はそのまま古典教育の内容理解と教授法にもつながるものであり、中等教育の目標とする古典教育の理念の修得にもつながっていると指摘出来る。

また　古典教育の目標を達成するためには、教師教育の内容にあっては、文学史や歴史的背景など幅広い知識を身に付けることは必須のことである。古文読解に中心があることは言うまでもないが、読解の質を上げるためにはその背後にある様々な基礎的知識が必要になる。従って幅広い総合的な教養を効率よく修得することが理想的である。

しかし一方で研究と教育の内容的差違もある。一番大きな相違は、研究方法論と研究史であろう。学校現場での古典教育に直接関わるものではない。先にも述べたように研究は学的方法論と体系を持っている。しかし教師教育としての卒業研究カリキュラムにおいて教科専門を対象とすることが存在する限り、研究史と方法論は指導対象となる。そのことが教師自身の教材開発と教育内容のより深い修得につながる要素となると確信出来るからである。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

5　まとめ

以上、古典文学研究と古典教育における理念や目標を確認し比較してきた。その結果、研究の目指す方向と教育の内容は近似したところにあることが確認出来る。もちろん研究は教育の実践活動面への関与は希薄である。しかし教育における教材研究は実践現場に即応した内容理解と教材化の力が求められ、内容理解の追求とテキスト評価に目的の中心を置く研究成果と方法は大きく寄与するものであろう。従って研究におけるテキスト評価を教材化につなぐことが出来れば理想的な相互関係を保つことが出来る。

この検討結果は教師教育に生かすべきであろう。教師に求められる資質の一つに教材化能力がある。研究とは異なっても作業過程は等しいものがあり、研究対象の深い認識が必要とされるばかりでなく、分析の視点や方法の能力育成の面では重要な要素となる。初等教育に下がるに従って教師にとって教科内容よりも教育実践の方にシフトされるが、伝統文化への認識と理解を培うという教育的な活動は、初等教育でも重要であり、教師がその教養を持っていることが理想的である。従って直接教材に反映されなくとも、古典文学への理解は必要なことであろう。

このように考えてくると、研究成果を教育内容に反映させることは極めて重要なことであると再認識される。従って教師教育も含めて研究と教育は密接な情報交換と交流を保つべきであると言えよう。

注１　全国大学国語国文学会が創立50周年記念として「学会の未来に向けて」という特集を組んでこの問題を論じている。「文学・語学」185号　2006.6

注２　「高等教育における国語・国文学(日本語・日本文学)教育の現状と問題点」同上「文学・語学」185号　2006.6

注３　近年、近代以降の古典研究の代表的な論考を一書にまとめた著述がある。秋山虔『古典をどう読むか』笠間書院 2005．1。また文学史と方法史の概略を示したものに、内野吾郎『日本文芸史素描』 泊帝社 1971.5 などがある。

注４　美学理論を体系的にまとめたものに、『講座　美学』全５巻　東大出版会 1984．5～85．5 がある。

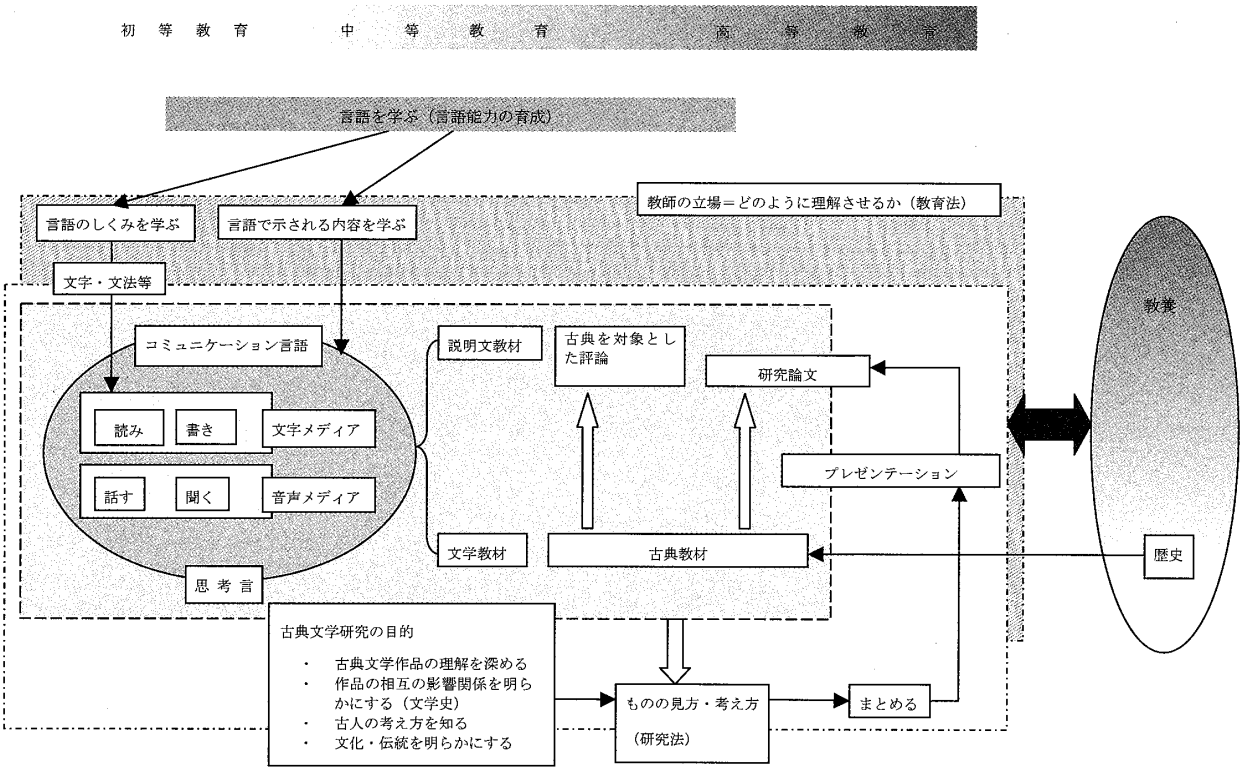
注５　西条勉氏の『古代の読み方　神話と声／文字』笠間書院 2003．5 はこうした点を古事記を中心として論じたものである。また古代文学会の活動においてもこうした理論を古代に如何に導入出来るかという模索が行われている。

注６　こうした問題意識に立ったものとしては、『日本文学講座』日本文学協会編1986 がある。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

図１　古典文学研究と国語教育（教科専門・古典）



NII-Electronic Library Service